

「個」からみた発達障碍, 「関係」からみた発達障碍

—関係をみれば, 関係は変わる—

小林 隆児

西南学院大学人間科学部社会福祉学科, 児童精神科医

I はじめに

これまで筆者は, 乳幼児期早期に対人関係の成立に問題をもつ子どもたちを「関係」の枠組みを通して観察しながら理解と治療の道を探ってきた。従来の「個」からとらえた「発達障碍」理解を「関係」からとらえ直すことによって何がみえてくるのかを考えてみたい。

II MIUで診た乳幼児55例の母子関係の様相

過去14年間, 筆者は母子ユニット (Mother-Infant Unit; 以下MIU) で行った関係発達臨床で出会った母子関係に深刻な問題をもつ子どもたち, すなわち「自閉症スペクトラム (以下AS)」における対人関係障碍の質的検討を手がけてきたが, 最近その成果をまとめた¹⁾。本稿ではそのおもな内容を解説しながら, ASの成り立ちを, 発達という観点からどのように理解することができるか述べる。なお, 一般には「自閉症スペクトラム障碍 (以下ASD)」と称されているが, ここではASDの診断基準を満たさない状態にある母子関係の問題をもつ事例をも含むものとしてASを用いている。そのことによってASDの成り立ちを明らかにすることができるのではないかと考えたからである。

1) 対象となった子どもたち

今回の対象は, 新奇場面法 (SSP) という同一の枠組で観察しえた55例 (男性49例, 女性6例) である。最年少1歳0ヵ月, 最年長5歳9ヵ月。

年齢階層別では, 1歳代8例 (男女比: 6/2), 2歳代16例 (15/1), 3歳代16例 (15/1), 4歳代13例 (12/1), 5歳代2例 (1/1) であった。0歳代の事例はSSPの適用年齢ではないことから除外された。

知的発達水準では軽度遅滞 (DQ 50~69) が24例 (43.6%) と最も多く, 全体の半数近くを占めた。ついで, 中等度 (35~49) 12例 (21.8), 境界域 (70~84) 11例 (20.0), 正常域 (85以上) は7例 (12.7), 重度 (35未満) 1例 (1.8) であった。

2) 母子関係をどのように観察するか

母子関係の様相の観察を一定の枠組で行うため, 筆者はSSPを用いた。SSPはアタッチメント・パターンの評価のために作られた心理実験的枠組であるが, 筆者は治療者という立場から, アタッチメント・パターンの評価という視点には馴染めず, 「甘え」という視点から母子関係の様相をとらえた。なぜなら, 行動科学的立場から生まれたアタッチメント研究は当然のことながらアタッチメントという子どもの行動に特化し, それに焦点をあてている。そのため子どもと母親とのあいだでくり広げられている繊細な関係を分断することになるが, それに対して, 母子双方のこころのありようを手がかりに治療を行う筆者は強い違和感を抱いたからである。さらに, そこできり広げられている母子関係の様相を素朴に観察していくと, 「甘え」という観点からとらえることによって, 子どものこころの動きが手に取るように浮かび上がってくることを実感したからである。そのような観点からSSPでとらえられた母子関係の様相は, 年齢層によって大きな変化が起こることが明らかとなった。本来SSPの適用年齢は1歳代であるが, 今回2歳代以上も含めることによって得られた知見である。

III 「アンビヴァレンス」はどのようにおもてに現れるか

1歳代8例について, ビデオ録画データをもとに詳細に検討した結果, 全例において以下のような関係の特徴を抽出することができた。

「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが, いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし, 母親と再会する段になると再び回避的の反応を示す」

そのため, 両者の間でいつまでたっても好ましい関係の深まりが生まれず, 逆に両者ともに強いフラストレーションを体験することによって, その関係は負の循環を生むことになる。このような母子関係の独特なありようを筆者は「関係からみた『甘え』のアンビヴァレンス」 (以下「アンビヴァレンス」と記す) と称したが, そこ

で子どもたちは「甘えたくても甘えられない」心理状態を体験することになる。さらに重要なことは、一般には孤立によって心細くなれば、強い不安とともに悲しみや怒りが湧いてくるが、「アンビヴァレンス」の強い子どもたちはそれを直接母親に向けることができないことである。本来ならば、そこで生まれた負の情動が抱っこされることによって快の情動へと変化し、心地よい体験となっていくが、彼らにはそれが期待できない。将来的に深刻な情動調整をめぐる問題を生むことにつながっていくことが危惧されるのである。

なお、今回の対象に0歳代の乳児は含まれていないが、対象55例の母親から聴取された乳児期の特徴と筆者が直接観察しえた少数の事例からも「アンビヴァレンス」の現れと考えられるさまざまな反応が確認された。その多くは、母親の働きかけに対する回避的反応としてその異常に気づかれていた。

IV 「アンビヴァレンス」による不安と緊張にどう対処するか

1歳代では子どもたちの「甘えたくても甘えられない」ための反応において、不安と緊張が第三者の目にも比較的分かりやすい形で表現されているが、2歳代になると、「アンビヴァレンス」の表現型が一気に多様化の様相を呈してくる。なぜなら「アンビヴァレンス」は子どもの「甘え」体験に阻害的に作用するため、いつまでも心細さは解消されず、強い不安と緊張に晒されるが、それは子どもにとって過酷な事態であるため、少しでもそれを軽減しようとさまざまなことを試みることになるからである。2歳代の子どもたちにみられる多様な反応行動はそうした不安や緊張への対処行動としてとらえることができる。

1) 対人回避的傾向から進展した対処行動—内向的反応

自閉症の特徴である対人回避的行動を、その内面に焦点をあててみると見え方が変わる。彼らは母親に対して「甘えたくても甘えられない」ゆえに、ことさら回避的態度を取っているのだ。それは日本人にとって馴染み深い屈折した「甘え」としての「拗ねる」態度である。筆者がそのように描写することができたのは、母子関係の様相という視点からとらえることによって、子どもの行動のもつ意味が文脈のなかで浮かび上がってきたからである。「個」の病理というとらわれから自由になって初めて可能になったということである。

一般に彼らが「自閉的」と感じられているのは、このように回避的構えがとても強いことが大きな要因となっている。多くの場合、その背後に動いている「甘え」に気づくことが難しいことによって、次第に彼らは自らの不安や緊張を緩和するため、孤独ななかで多様な対処行動を取るようになる。それが2歳代になると顕在化して

くることになる。

第一に、相手から距離をとって直接的な関わりを回避する。しかし、母親の存在が気になり、何かに集中することはできない。そのため母親の存在を気にしながら何かとサインめいた行動を取るが、一定の距離をとってそれ以上には近づかないという行動である。そのような子どもの行動は、われわれには「気移りが激しい」「多動」あるいは「落ち着きの無い」状態として映る。

第二に、母親に対して直接的な関与を回避し、自己充足的な方法で対処しようとする行動である。それは何かによって気を紛らわし、不安と緊張を多少なりとも和らげようとするための行動である。これまで「くり返し行動」「常同反復行動」としてとらえられてきたものである。

第三に、自分の周りの環境を極力変化の無い状態に保とうとする対処行動である。不安が強くなり安心が得られない状態に置かれると、周囲の知覚刺激が子どもたちにとって不快で不安を駆り立てるような色彩を帯びたものになる。そのため、子どもたちは周囲の世界を極力変化の無い状態に保とうとする。われわれには些細と思われるような変化が子どもたちには強い不安を引き起こすからである。「同一性保持 (sameness)」などといわれ、自閉症に特徴的なものとされてきたものである。

第四に、常に他者との関わりを回避していくならば、他者に依存することはできず、結果的に「過度に自立的に振る舞う」ようになる。自分で思うようにならない時でも他者の力を借りることなく、あくまで1人でやろうとする。対人回避的で自閉的と印象づけられる行動を取るがゆえの必然的な結果である。

これらの対処行動の多くはASDの中核的な症状とされてきた「自閉的な対人行動」「常同反復的行動」「強迫的こだわり」などである。これらはこれまで一次的障害としてとらえられ、脳障害との関連が強いものとして理解されてきたが、実は母子関係において生まれた「アンビヴァレンス」すなわち「甘えたくても甘えられない」ことによって必然的に生まれた反応行動である。「甘え」に焦点をあてることによってこれらの行動はすべて一元的に理解できる。

2) 相手との関係を求めるための対処行動—外向的反応

次に取り上げるのは、子どもの方から直接的に母親に何らかの関わりを志向しながら対処しようとする試みである。この種の対処行動は母子関係をより一層複雑なものにしていく。

なんとか母親の関心を自分に引き寄せようとして、相手の嫌がることをやろうとする。「甘えたくても甘えられない」子どもにとってある意味では自然な反応だということもできるが、それはこれまで「挑発行動」といわれてきたものに該当しよう。

このような行動に対して用いられてきた「挑発行動」

という表現は、子どもの立場からとらえたものではなく、われわれ大人の視点からとらえたものである。子どもたちはけっしてわれわれを挑発して相手の怒りを引き出そうと企んでこのような行動を取っているのではない。あくまでその動機は「甘えたくても甘えられない」ために、相手の関心を自分に引き寄せたいという「甘え」に端を発したものである。つまり、「甘え」を背景に生まれた「関係」の問題としてとらえることが大切だということである。

しかし、このような対処行動はあまり功を奏することはない。相手の嫌がることをやれば、相手の関心を引き出すことには成功しても、叱咤されることによって結果的には突き放される。すると子どもは再び心細さから不安に襲われる。それがさらなる相手の関心を引き出すための「挑発行動」を誘発する。このようにして母子関係の悪循環は進展していく。思春期以降に頻発する行動障碍の多くはこのような関係の悪循環によってもたらされたものである。将来的に悲惨な結果を生む対処行動である。

次いで取り上げたいのは、先の「挑発行動」が直接相手に向けられた行動であるのに比して、相手の関心を自分に引き寄せようとする点では同じ目的をもつが、行動としては直接自分に向けられたものがある。それがわざとらしく壁に頭を打ちつけるなどの注意喚起行動としての「自己刺戟行動」である。

「自己刺戟行動」も、先の「挑発行動」と同様、功を奏することはない。時には、相手から同情の念を示されることはあっても「甘え」そのものが享受されることは期待できない。相手からは制止され、禁止されることになる。すると子どもは当初の意図が達成されず、突き放されることによってより一層心細さは強まっていく。その結果、「自己刺戟行動」はより一層激しいものになっていく。「自傷」と称されてきたものは注意喚起行動としての「自己刺戟行動」が発展したものとしてとらえることができるのではないか。このような「自己刺戟行動」は情動負荷を軽減する働きをも担っていることから習慣化しやすい。

3) 相手の顔色をうかがう行動から進展した対処行動

「甘えたくても甘えられない」子どもたちは、いつまでもたっても「甘え」を断念することができず、常に母親の顔色を伺うようになる。子どもたちはなんとか母親との関係を維持しようとして試みる対処行動は、その深刻さの度合いからいくつかに分類できる。

第一に、「甘えたくても甘えられない」子どもがなおも母親との繋がりを求めようとする際に、最も穏便な解決方法は、相手の意向に沿って行動することである。相手の怒りを引き起こすことなく、相手も喜んで受け入れてくれるからである。その典型的な対処行動が「いい子になる」ことである。相手の期待に沿うことによって自分の存在を認めてもらおうとする試みである。

第二に、先の相手の意向に従うことと近縁の反応であるが、相手の意向が読みにくい場合、子どもはたじろぎ、どう対処すれば良いか困惑が強い。そこで相手の意向を常にうかがいながら、相手に気に入られようと懸命に振る舞うようになる。「相手に取り入る」「媚びる」などと表現できるような言動である。このような対処行動は、われわれには演技的色彩を帯びて映りやすいが、子どもなりの母親との関係を維持しようとする懸命なものがきとしてとらえることができる。それでも「甘え」が得られない時には、母親が見ている前でストレンジャーである他人に甘えてみせ、母親に「当てつける」「見せつける」ようになる。

第三に、「いい子になる」ことが、自分なりの能動的な対処行動であるとするならば、次に問題となるのは、自分の欲求や意思を全面的に押し殺し、相手の思いに「過度に従順に振る舞う」ことである。その結果相手の思いに翻弄されることになる。母親の価値観に引きずられるようにして母親の誘いにのせられていけば、このような結果を生む危険性が高まる。それほど子どもは無力な存在だということである。このような対処行動がいかに痛々しいものかは誰でも想像できようが、われわれがとくに問題としなければならないのは、それが後々深刻な自我障碍をもたすからである。

4) 明確な対処法を見い出すことができず周囲に圧倒された状態

最後に、最も深刻なものは、自分なりの効果的な対処行動を見い出すことができず、周囲に圧倒され、なす術を無くしている状態にある場合である。強い「困惑」が生まれ、「茫然自失」となっていく。そこでは周囲の刺戟が子どもたちにとって圧倒的な力をもって侵襲的あるいは侵襲的に映り、迫害的な不安に襲われていると想像できる状態である。そのため、彼らは自分でその場から逃げることも、誰かに助けを求めることもできない。まさに全身が凍りついたような状態を呈するようになる。それは精神病理学的には「カタトニア」と称される病態と同質のものだと考えられる。

この種の行動は、先ほどまでの対処行動と同列に並べることにはできないほどより深刻なものである。精神病的反応とはまさにこのような状態ではなかろうかと推測されるのである。

以上、2歳代になって顕在化する多様な対処行動をみてきたが、3歳代以降になると、それはより一層複雑になるとともに、子ども自身が母親や第三者の前で「アンビヴァレンス」それ自体を容易にはおもてに出さなくなる。その意味でも生後3年間を中心に母子関係の様相を観察した今回の結果は、これまでASDの症状や障碍と記述されてきたものの成り立ちを考える上で大きな示唆をわれわれに与えてくれる。

V おわりに

「自閉症スペクトラム」とされる子どもたちの生後3年間を中心とした母子関係の様相を、最近の筆者の研究結果を紹介するなかで解説してきた。そこで筆者が教えられたのは、ASDとされる子どもたちが、けっしてわれわれの想像もつかないような世界で生きている存在ではなく、われわれと同じ地平で、われわれと同じ気持ちを抱きながら生きている存在だということである。それを可能にしてくれたのは、従来のアタッチメント研究にみ

られる行動科学的立場からではなく、「甘え」というところの動きに焦点をあてた立場からの観察である。わが国特有の文化である「甘え」の視点は、人間関係のこころ（情動）の動きをとらえる上できわめて大きな力となることを、筆者は今回の研究を通して改めて実感した。

文 献

- 1) 小林隆児：「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて—、ミネルヴァ書房、2014。